



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.214  
2021.7.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 加曾利B式土器

— E.S.モースと坪井正五郎のはざま —

鈴木 正博

### ● 第40回 ● 宝ヶ峯に至る途：椎塚との交通

【承前】坪井正五郎の「人類学雑誌」は種族と「模様」の比較に関する形態学を論じており、大野雲外の「土器紋様の分子」が拙速な類似レベルに傾くことから、**美術史等の成果も踏まえた「模様」分析を促し、「分子」の空疎な定義である「混交中間的紋様」に対しては、「模様」の成り立ちや機能に着目して「混合意匠の模様」へと深掘りし、今日の「クロス土器」研究の意義にまで「模様」概念を昇華させる。**

大野雲外は鳥居龍蔵の千島アイヌを契機にアイヌとの類似の立場に変転しており、**客死前後に休刊中の人類学雑誌も大正3(1914)年には再刊され、早速同年、「アイヌ紋様と先住民の紋様との比較」を目的とし、坪井正五郎の教訓も活かし、比較の対象を地域から広く4種族(「先住民」・「アイヌ」・「ギリアーク」・「オロチョン」)へ拡大し、「土器紋様の分子」ではなく、「渦形紋様」・「貫紋様」・「均整紋様」の比較により「非コロボックル説」(「先住民」は「ギリアーク」や「オロチョン」よりも「アイヌ」と類似)の唱導に至る(「紋様の比較研究」『人類学雑誌』第29巻第11号)。共通概念抽出に従う比較を説き、結果的に稀少例に傾く「非コロボックル説」は、「模様」の実態志向とは異なり、**濱田耕作を彷彿とさせる。**蛇足ながら、後に人類学教室を辞職した鳥居龍蔵は「想へば、私はかつて大野氏と共に我が石器時代民族のアイヌである事を証明せんとした當年の苦心は今にこれを忘れることが出来ない。」(大野雲外(1925)『遺跡遺物より観たる日本先住民の研究』所収の「序言」と回想し、**大野雲外もアイヌと「同一紋様の図」を本文に追加する執念**を見せるが、「模様」構造は蚊帳の外である。**

このように「土器紋様の分子」戦術(種族間の素材に拘らず共通する「分子」を細部・局部に見出し、その間での類似を導出)への教訓を活かし、改めて「分子」ではなく「紋様の比較研

究」を繰り出す大野雲外であるが、「先住民」への眼差しに目を転じるならば、「紋様の比較研究」発表と同じ年に宝ヶ峯遺蹟が発掘される。「非コロボックル説」は宝ヶ峯遺蹟との出会いによりどのような成果をもたらすであろうか。実はこの出会いこそが八木榮三郎の椎塚貝塚とその後の短報である「コロボックル考古学」への再注目となり、**学史的に椎塚貝塚と宝ヶ峯遺蹟の共通性が認識され、山内清男に至る。**

そこで『宝ヶ峯』所収10代齋藤善右衛門日記(以後、「10代日記」)に戻り、大野雲外関連の動向を確認する。**明治43年7月28日の坪井正五郎帰京後は発掘が続かず、9月10日を以て中断し、以後明治44・45・大正元・2年と続けて3年間は発掘が行われず、大正3年に新たな動きが見られる。**3月5日に山中燦(県図書館司書)の突然の来訪に際し、出土遺物の重要性を個別に教示され、早速4月から再び発掘が開始される。山中燦への連絡は翌5月1日「人面ヲ発掘ス」に対して5月3日「先日発掘ノ人面ノ土器ヲ撮影、図書館山中氏へ送ル」が最初で、山中燦の「考古学雑誌」への土偶紹介が人類学教室にも知られ、6月30日「東大人類学大野雲外ナル人ヨリ宝ヶ峯ノ土器発掘方許サレタシト事通知アリ七月廿日過ギ着村スベケレバトノ事、来遊セラレタシト申越タリ」と相成る。そして7月21日に大野雲外が来宅、22日に発掘するも成果に乏しく中止し、「先日発掘ノ人面付香炉形土器八他二例ナク珍物ナル由」(ゴチック体は引用者、以下同様)と遺物の検分を行い、23日にも他地点を発掘するが成果無く、27日に帰京し、直後には「人面付香炉形土器」を紹介する(「口絵」『人類学雑誌』第29巻第9号)。その後は省略に従う。

大野雲外は来訪直後に「人面付香炉形土器」を学会に紹介し、続いて「紋様の比較研究」を経て人類学教室の新たな立場を表明し、翌大

正4年になり宝ヶ峯遺蹟を詳細に取り上げる。そこでは鳥居龍蔵の「**同時代異部族説**」に範を求め、遺蹟出土の土器群から「部族」の如く扱う「形式」を見出し、複数「形式」の混合に夫々「先

住民の交通」が推定され(大野雲外(1915)「先住民の交通に就て」『人類学雑誌』第30巻第6号)、**宝ヶ峯は加曾利B式の椎塚と同じ部族による交通範囲との認識に至る。**

第45図は大野雲外が「同時代異部族説」の象徴とする「**関東式**」と「**奥羽式**」で、宝ヶ峯遺蹟において「発見された土器を見るに、奥羽式と関東式と混合してある、**関東式としては常陸國福田又は椎塚の遺跡から出たものと間違へらる様な、全く似たる土器を発見さることが確かめられた**」と強調する。椎塚貝塚の第43図に啓発を受け、宝ヶ峯遺蹟における「奥羽式と関東式と混合してある」第45図を以て、「**関東式として<椎塚-宝ヶ峯>間の「全く似たる土器」との系統論に至る。**加えて八木榮三郎の「**大略二様の別**」や「**精粗二種の品**」に抗うように、「**大別して二様に区別することが出来る、一は奥羽式にして、一は関東式、この両様の土器が、混合して発見される**」とこの「**二様**」を「**精粗**」とする異見も示す。更に「三尺或は四尺位」もある遺物包含層は10代齋藤善右衛門が3層の土層区分を導出しており、やがて「**二様**」の「**形式**」区分と層位との関係を知ることになる。



▲第45図：大野雲外による宝ヶ峯遺蹟の「関東式」と「奥羽式」

\*巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

#### 目次

■加曾利B式土器 宝ヶ峯に至る途：椎塚との交通(第40回) 鈴木正博 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイパレット・サイト(第207回) 中塚凧沙 …3
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第33回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2	■考古学者の書棚 『未開人の性生活』 三上徹也 …4

## 考古学の履歴書

## ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第33回) 問壁 忠彦・問壁 霞子

## 7. 吉備真備の母「楊貴氏墓誌」の謎(2)

前回近江氏が、江戸時代以来、世間では信用されていた奈良県出土の吉備真備母の墓誌「楊貴氏墓誌」を、偽物の可能性が強いとした点で、根拠に上げた埴敷き大甕を伏せた火葬墓は、真備祖母骨蔵器出土地点とされる位置から30mも離れない、同じ尾根の南先端を僅かに下がった地点から、発見されたものだった。しかも現代20世紀になっての出土であった。これも楊貴氏墓誌の真偽には関係なく、真備祖母骨蔵器との関係で注目される火葬墓には違いない。

現在祖母骨蔵器出土地点を訪ねる際、尾根に沿って階段状に整備された参道がある。その最終地点右側に、下道氏墓地を示す石柱が建つ。そこから言えば真南で、手前の山道を距離で10mばかり下った道の中で、やや西よりが出土地点とされる。発見は前に述べたように、昭和18(1943)年9月12日、太平洋戦争のさなか。村民が山道修理に登っていて甕底が露出していたのを発見、巡査立会いで掘り出したもの。

発見者の話では、大甕が伏せられ、口縁周辺には4~5寸(15cm足らず)木炭がつまり、甕は12枚の瓦(埴)の上に伏せられたものとのこと。この瓦と甕の間は6~7分(2cm)くらいの粘土で密閉。甕は完形で、須恵質の灰白色、焼きはあまい感覚。丸底で、卵を胴切りしとがった側を除いた形、口径・高さとも50cm弱、内部には碎片の骨が真ん中に盛られていただけで、他には何の発見物も無かったという。下敷きの埴も須恵質、ほぼ灰白色だが焼斑で、黄褐色も3枚ばかりあった。長さ約34~37cm、幅約11.5~13cm、厚さ3cm弱だが、大きさにはかなりの大小差があり、角田氏は何かの建材が一部残されたものを集めての利用か、とされているが、むしろ少量のものが急遽製作されたようにも見える。これらのものは全て圀勝寺に納められていた。

報告者の角田文衛氏はこの年の11月17日に現地を訪れ、墓壙を再発掘、圀勝寺の遺物もすべて検討、発見者の言も聞いてほぼ間違いないと報告。ただ圀勝寺では、瓦つまり埴は11枚のみ受け取ったという。発掘者は特に枚数は余りはっきりしないが、誰も持ち去った人は居なかったとのこと。角田氏の検討では11枚で、その内6枚は折れた状況である。現在町の文化財指定では13枚になっている。後日の検討で、破片の状況から13枚とされたのであろう。

ところで、重要なことは、この祖母骨蔵器発見地点では、明治33(1900)年に地元保光会によって大発掘が行われ、この際発掘されたとされる多くの土器片も、すべて圀勝寺で伝えられていた。ただ現在は、角田氏調査の資料を含め、明治期調査の土器など殆どが、矢掛町教育委員会で保管されて展示も見られるが、国指定の真備祖母の骨蔵器や、文字の書かれた土器類などは、圀勝寺で保管されている。

とくに明治33年調査当時の詳細から、昭和初年頃までの下道氏墓地について興味のある方は、永山卯三郎著『岡山県通史・上巻』1930年に、「備中国小田郡に於ける下道氏の墳墓」とした梅原末治論文(『考古学』7-5)が、そのまま転載されているので見ていただきたい。その中には、明治33年調査時発

見として、「備真備公 骨」と刻記した素焼き土器片や、朱彩素焼き土器の祭器があったと記載して、弥生時代の筒状の大形器台や飾られた壺か器台の、口縁部と見てよいスケッチまで記されている。ただこの弥生土器上の文字資料には、梅原氏は無学の人が偽刻したものと記している。

しかしいま一つ問題の文字資料があった。近江氏が楊貴氏墓誌検討に際して、偽物の証明として大きく取り上げた資料である。梅原氏も先の論文中これにもふれているが、発掘時より前の資料のように記され、こちらは良い、の論調である。現在も、明治33年と寄贈者名が墨書された木箱に入って、圀勝寺で保管されている。

私は40年以上も前、富比賣墓地買地券の報告の際、下道氏墓地周辺出土遺物の報告も兼ねて、圀勝寺を訪れた。先代のご住職の時であり、短時間での検討であったが、文字資料の2点は丁寧に拝見した。その1点が弥生時代の甕胴部破片に書かれた文字であることは、現在では多少でも考古学に興味のある人であれば、すぐ分かるもの。その時は他の資料が気になり、弥生土器上に見えていた文字の方は、写真も撮らねば、メモもしていない。今となっては反省している。その文字がどのようなものか、明治時代人の文字、それを書いた人の手がかり…今回改めて見ると、その後誰かが表面を強く擦ったことで、文字は読めなくなっていた。偽刻とわかってのことであろう。これも歴史だから、ぜひ大切に取っておいてほしい旨を圀勝寺にお願いした。

少々脱線したが、いま一つの資料の方は40年昔の『倉敷考古館研究集報 15号』(1980.4)にも「吉備真備祖母骨蔵器周辺の問題」として、拓本と断面図を記載した。埴の幅は10.5~11cm、厚さ約3cm、下半が折れ現存長約17cm。須恵質ながら焼きにより本来は黄褐色だが、多くの採拓のため黒色が強い。文字は上端から10cmばかり下がった位置からほぼ中央2行に、1.8cm四方ばかりの中に入る大小の文字で、「左衛士府…」夫人下□…」とあり□内は道をおもわす字画を残す。少し細い几帳面な文字で、焼成前のめくれなどは一切観察できない。その時、まったく先入観を持たず、この文字を、埴製作時か、それに近い頃の刻字とする証拠は無く、買地券としては扱っていない。(次回に続く)

## 問壁忠彦 略歴

1932~2017年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

## 問壁霞子 略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

## リレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 207

## 発見70周年を迎えた、国指定史跡フゴッペ洞窟 ～北海道余市町—— 中塚 凧沙

余市町東部、小樽市と隣接する現在の栄町地区は、かつて「畚部」の文字をあてて、フゴッペ村と呼ばれていました。フゴッペはアイヌ語地名で、その地名は今でもフゴッペ岬やフゴッペ川、フゴッペ橋などにのこっており、「波の音が大きいところ」、「番をするところ」などという意味ではないかといわれています。この「フゴッペ」の名を冠する遺跡、国指定史跡フゴッペ洞窟について紹介します。

昭和2(1927)年10月8日、フゴッペ洞窟の線路側の岩肌には、顔のかたちをした岩塊と人の形を線で描いたような刻画が見つかりました(以下「旧フゴッペ彫刻」)。発見したのは、国鉄(当時)蘭島駅保線勤務の職員で、発見は保線工事の土砂取り作業をしていたときのことでした。9つほどの文字とも絵画ともつかない奇妙な刻画で、考古学業界はもちろん世間でも大きな話題となりました。当時は、偽刻説やアイヌ民族がのこしたものだといわれたり、古くから小樽市手宮の手宮洞窟の岩面刻画が「古代文字」と呼ばれていたため、ここでみつかった刻画も「フゴッペの古代文字」と呼ばれました。しかし、残念なことに当時は柵を巡らせただけの粗末な保護施設だったので、旧フゴッペ刻画はいつしか土砂に埋もれてしまい、現在はみることができません。

余市町出身のアイヌ民族の歌人、違星北斗はこの「フゴッペの古代文字」を指して「奇形文字」と呼び、氏の著書である『コタン』中の1章「疑うべきフゴッペの遺跡」で、「我等アイヌにとっても奇怪な謎であった。」と述べています。同書中には、フゴッペの語源や付近に住んでいた人々についての言及があります。そこには「鍋を持たない土人(原文ママ)があて生物ばかり食べてゐた」ことを理由にして、その土地を余市アイヌは「フーイベ」と呼んでいたこと、また同じ土地を指して、そこに蛇がたくさんいたので小樽市忍路のアイヌ民族は「フウコンベツ」と呼んでいた、ともあります。違星がアイヌ民族の古老に聞いたことには、フゴッペにはアイヌ民族とは別の人たちが住んでいて、彼らを「クルブンウクル」と呼んでいたのだそうです。「クル」とは「岩」で、「あたかも水際の岩の下にでもゐるような人種」の人々が住んでいたという伝承を違星が聞いています。



▲フゴッペ洞窟 刻画

旧フゴッペ彫刻の発見から23年後の昭和25年の夏、フゴッペ洞窟が発見されました。当時札幌市内の中学生であった大塚誠之助氏が小樽市蘭島にキャンプに来ていた合間に、フゴッペ洞窟のある丸山を訪れました。これは、札幌南高等学校の郷土研究部に所属していた兄の以和雄氏から旧フゴッペ彫刻を見ることを勧められてのことでした。少年がこの彫刻をみていたところ、子供が腹ばいになって辛うじて入れる程度の小さな穴が開いていることを認め、付近で土器片を採集、兄にそのことを伝えたということです。兄から郷土研究部にその話が伝わり、はじめはクラブ活動の一環として調査され、多量の土器や石器、骨角器がみつかりました。郷土研究部顧問であった島田善造氏より、近隣の西崎山環状列石で調査を行っていた北海道大学助教授(当時)であった名取武光氏に今後の調査について相談し、名取氏を団長として、考古学・人類学・動物学・地質学などの専門家とともに、地元の大学生、高校生の協力によって調査団が組織され、昭和26、28年に本格的な発掘調査が行われました。

こうして調査がはじまったフゴッペ洞窟では、土器、石器、骨角器など多くの遺物がみつかります。土器のほとんどは後北式土器でしたが、鈴谷式土器や北大式土器なども確認されました。そして、何よりも最大の発見は、奥行き5m×間口4m×高さ5m程度の洞窟内の岩壁に広がる800を超える刻画でした。刻画は、人物像や仮装人物、四足獣、海獣、魚、舟などの刻画がみつかりました。

フゴッペ洞窟は昭和28年11月に史跡指定され、昭和30年に最初の覆家(木造)が建設、さらに昭和47年には保存施設が作られました。洞窟を構成する岩石は凝灰岩であり非常にもろく、凍結融解を繰り返すと簡単に壊れてしまうものです。このため、保存施設では洞窟内部の気温を保ちながら、カプセル越しに見学してもらうシステムとなっています。しかし、昭和47年の保存施設では、施設の屋根と斜面との合わせ目で岩石が風化し、隙間ができたことで水が浸入してしまい、昭和60年ごろから壁面に緑色の微生物が発生してしまいました。これを受けて、平成9年度から「史跡フゴッペ洞窟保存調査委員会」が発足され、調査を経て、現在の保存施設が建てられました。

フゴッペ洞窟は昨年、洞窟発見70周年を迎えました。現在は新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため十分に来館者を受け入れることができていませんが、町内の遺跡のなかでも非常に多くの方に注目されること多いフゴッペ洞窟です。しかし、「フゴッペ洞窟ってアイヌの遺跡?」、「これって文字でしょ?」、「暗くて見えにくいのどうにかならないの?」など、様々な点で本当のフゴッペ洞窟を伝えきれていないことが現状です。70年前にみつかったあの日から多くの人々によって調査・保存されたこの遺跡を、これからどう伝え、どう保存していくのか。日々劣化と闘いながら、これからのフゴッペ洞窟の在り方を模索しています。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは遠藤ゆきのさんです。

## 考古学者の書棚

## 「未開人の性生活」

マリノウスキー 著 泉靖一・蒲生正男・島澄 訳／新泉社(1971) ———— 三上 徹也

文字のない世界を、残された物質のみから当時の生活を復元して語る歴史の復元には限界がある。その限界を少しでも広げて厚みを持たずに、民俗学や民族学、人類学の成果は大変心強い味方といえる。そんな世界を覗いてみたい、と開いた一冊が本書である。

マリノウスキー(Bronislaw Malinowski 1884年4月7日～1942年5月16日)は、ポーランド出身のイギリスの文化人類学者である。文化人類学者の19世紀の代表が、『金枝篇』で著名なフレイザー、20世紀の代表がマリノウスキーといわれる。そもそもマリノウスキーは、フレイザーに魅せられてその道に進んだと自著の中で述べており、よって2人は師弟関係の仲である。ただし両者の大きな違いもいわれている。二人の学説の最たる違い、それが実態調査の重要性の認識である。わかりやすくはモルガンを例外として、19世紀の文化人類学者は、なんと実態調査を行わなかった。旅行者や宣教師、行政官の見分などを情報源に、それを都合良く使っていたというのが実態という。しかしマリノウスキーは徹底した実態調査を行った。本書の対象となったメラネシアのトロブリアンド島には1914年に出かけ、この時第1次世界大戦がはじまって動けなくなったという事情もあったようだが、18年までの足かけ5年、島民の生活に溶け込んで、生活の隅々まで細かく調べあげたのだった。このやり方を集中的調査と呼び、同じ実態調査でも広く各地を大まかに調査するエクステンシヴな方法と対照的に考えられて、車の両輪に例えられるが、特に前者の重要性を広めた点でマリノウスキーの功績は不滅とされる。

そのトロブリアンド島での調査の成果は、日本では1956年から翌年にかけての『世界性学全集』(河出書房)全12巻の第9巻に紹介された。後に単独で1971年復刻された、そのタイトルが『未開人の性生活』。何とも興味をそそられて、惹きつけられた。日本の民俗学ではなかなか目に触れる機会の少ない、ともするとタブー視されがちな分野である。考えてみればここを避けて人々の永続的な営みはなく、その原始的なあり様には、縄文時代のそれを覗けるような思いで惹かれた。筆者は言う「特定の社会を研究する社会学にとって、個人の性愛生活をめぐるもろもろの習慣、観念、制度の研究は、基本的な重要性をもつものである」、その通りだろう。そして、「本書はニューギニアの北東に横たわる、サンゴ礁の島、トロブリアンド諸島原住民の性関係を取り扱う」のである。ここの住民は、母系氏族制にあり、男女の恋愛・結婚および種族生活の諸関係について、以下の内容が綴られる。種族生活における両性の関係／女性の地位／結婚前の性交渉／結婚への道／結婚／離婚と死別による結婚の解消／生殖と妊娠に関する考えと慣習／妊娠と出生／慣習的な放縦の諸形態／求愛および性愛生活の心理／愛と美の呪術／性愛の夢と空想／道徳と作法／近親相関の神話。

何れの内容も、両性にとっても社会生活にとっても、避けて通れぬ行為である。例えば原始社会にも離婚などがあったのかと、こんな基本的な問題の存在にも、ああそうなのかと不思議な感動に包まれる。ここの住まいも縄文の竪穴住居に変わりはなく、ではその狭い中で性生活は、というような疑問にも観察の眼は行き届く。

そのすべてを紹介するなどできないなかで、最も私が驚いた一つを紹介したい。

それは新しい生命をもたらす過程、つまり妊娠に対する認識である。トロブリアンド島民は、それはすべて霊的世界と女性器官との関係と捉え、生理学上の父子関係が入り込む余地はここにはな

かった。生殖関係における男性不在こそが母系制を形成するという理論的基礎付けであることに納得できるが、ではどのように妊娠に至ると考えるのか。ここには再生観念が支配していた。すべての霊は若返る事、そして子供はすべて霊の再生であるということだ。ただし幼児は誰の再生であるのか、つまり以前生存して居た時誰であったか、というようなことは誰も知らないし、関心のないことだという。では具体的に妊娠は如何に起こると考えていたか。海を浮遊する再生前の幼児霊が、沐浴に来た女性の体内に入る機会を待っている、ことがここでは一つの言い伝えとなっている。そこで大切なことは、女性に子供が宿るために道が開いていなくてはならない、つまり膈が開いている必要があり、従って処女は妊娠しないと考えて、女性は非常に早く、子供の時から性生活を初めたのであり、どこの村にも処女はいないというのである。

さて本当に生殖に男性不必要が信じられているのだろうか。例えばある夫が1年以上、別の夫は2年間も留守にした後家に戻ると、赤ん坊が出来ていて、ともに大喜びしたというのである。性交と妊娠の無関係を信じる確かな証に違いない。なお、妻の性生活に関しては現在のそれであれ、過去のものであれ、決して言及しない、というのであって納得できる。

このように家族構造の点で、生理学的に父親が必要であることを全く知らないのであるが、しかし社会的には、いかなる家庭も父親を持たねばならない、という父親不可欠観が堅く持たれた。「父親の持つ社会的な役割は、その生理学的性質の認識なしに確立されており、また規定されている」というのである。なお、霊が人間の妊娠の原因であるが、動物の場合には偶然に妊娠すると考えられているのだそうだ。

こうして「睾丸の生理機能について彼らが全く無知なこと」で、「男の精液が生殖力を持つことを全く認識していなくて、性的には単なる「装飾的付属物」に過ぎないと考える、つまり性交によってのみ子供ができるなどを全く知らない、思いもよらない世界があった。

そう知ると、確かに妊娠に性交の必要は、どのように知識されたのかを、不思議に思う。遊牧民ではメス・オスの交尾が妊娠に繋がることを経験的に理解して、故にスムーズな管理に去勢なる方法を見出した。しかし人間の懐妊はやはり動物とは違って性交が関与しないと考える場合が多かった、と聞いたことがある。まして農耕民族たる日本では、とってしまう。去勢は動物だけではなく、人間の場合においても世界各国各地にみられるという。中国の宦官、ヨーロッパのカストラート(ボーイソプラノ音域保持のために去勢された男性歌手)などがよく知られる。しかし、日本には存在しないことも性的認識の欠落と無関連でないかもしれない。

さて縄文世界の中にあっては、土偶と石棒が子孫繁栄を祈る生殖祭祀の祭具と理解されることを多くする。この両者一対の考えは、生殖に性交が関与するという知識が前提である。しかし果たしてどうなのか。土偶はそうであったとしても、石棒はどうなのか。素材も土と石と全く違う。

現在の常識や当たり前が通用しない時代や地域のあることを、改めて突き付けられた。考古学には今の当たり前をかなぐり捨てて遺跡や遺物と対面する、これが如何に肝要か、強い示唆を受けた一書であった。

## アルカ通信 No.214

発行日 2021年7月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : http://www.aruka.co.jp